
いつもの図書館～あすか～

shirahae

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもの図書館〜あすか〜

【Nコード】

N4496D

【作者名】

shirahae

【あらすじ】

前回の作品「いつもの図書館」略して「いつ図書」で突如現れた謎の女性、飛鳥。彼女の過去が明らかに。

プロローグ

僕はあすか。女なのに僕って言うのは不自然だってよくいわれるけど僕は名前が女みたいなだけで女ではない。僕は世越飛鳥せしあすかという少女をずっと見てきた犬の編みぐるみなのだ。何かのキャラクターらしいのだが彼女があすかと名づけたときから僕はあすかであって、そのキャラクターの名前なんかどうでもいい。

彼女が自分の名前を僕に与えることからわかるが彼女は僕をかなり気に入ってくれているようで、どこへ行くにしても僕を連れてゆく。もちろん、学校にも。

僕は彼女が幼稚園にいる頃サンタクロースにつれてこられたように、彼女は僕の誕生日を十二月二十五日にしたようだ。彼女には伝えていないけれども本当の僕の誕生日は十二月九日なのであるが、まあそんなのはおいといて今回僕が語るのは彼女が語らなかつた彼女の過去についてのお話である。

第一章 暖かい春風と

「うわっ！ もうこんな時間！」

その大きな声で僕は目覚めた。飛鳥のつかんでいるクマのかわいらしい小さな置時計をこっそり覗き見ると現在朝の八時過ぎ。彼女は遅刻の常習犯というほどでもないがなかなかの寝坊率である。僕が知ってる限り最近遅刻が無かったのに重大な今日に限って寝坊をしたようだ。彼女は布団から飛び起き急いで制服に着替え、僕がぶら下がっている大きな旅行カバンを肩に担ぎ急いで一階へと駆け下りた。

「おはよー！ お父さんお母さん！」

飛鳥は元気いい声を家中に響かせながらリビングに飛び込み、ついでに家中に響くような大きな音でドアをバーンと開けてしまった。

「おはよう飛鳥。元気がいいのはわかるが寝坊とドアを傷つけちゃダメだよ」

「あう！ そんなつもりじゃなかったのについ……」

彼女が少し恥ずかしそうに父親に言う。

「急いでるんだろ？ これ持って学校行ってきなさい」

飛鳥は父親が作ったサンドイッチとお茶の入ったペットボトルを受け取り、母親が微笑んだのを確認すると先程の勢いそのまま玄関の方へ走り出した。

（こらこら、女の子なんだから歯磨きと顔ぐらい洗っていきなさい。）

僕の声が届いたのかどうかわからないが、彼女は急ブレーキをかけ振り返って洗面台へと突っ込んでゆく。身支度がきちんとできたところで礼儀のよさで有名な公立中学校へ色付きだしたもみじなんか全く見ずに走り出した。

ざわざわとしている中学校のロビーに飛鳥は走りこんでいった。

その土が少し被っているレンガ調の床の上には、白を基調としたスニーカーと履きこなした感じのある白一色の靴下を履いてきちんと制服を着ている生徒たちが居り、これから予測される楽しい出来事の計画について話し合っている様子だった。飛鳥がどたどたと重い荷物を背負った足音を響かせると、足音をひるった生徒たちが彼女の方をちらりと、ほほえましい光景を見るような目で見た。

「はろー飛鳥様！ 皆に注目されてるよ！」

「もお！ おつきい声で騒がないでよ恥ずかしい！」

「恥ずかしいなら学年全員が集まるようなときに遅刻しないことだな！」

飛鳥の親友、というか遅刻仲間の雪博ゆきひろが飛鳥をからかっている声でロビー全体の生徒のほとんどがくすくすと優しく笑い出した。

飛鳥はこんな目立つような登場をしなくてもいつも目立っていた。サラサラと小川が流れるような瑞々々《みずみず》しいストレートのロングヘアーをポニーテールにしており、顔にはパツチリとした目、高くはないがすつと筋の通った鼻、少しふっくらとした頬に浮かぶエクボ。肌は夏の日焼けが少し残っていて薄い小麦色をしている。

僕は修学旅行の出発が待ちきれなくてそわそわしている生徒たちをぐるっと見て、いつも思うことをふとつぶやいた。

（やっぱり飛鳥は……）

「やっぱり飛鳥はこの中で一番かわいいなあ……」

周りの誰にも声が届かない僕の変わりに、飛鳥の小学校からの幼馴染である亜夜奈あやなが言ってくれたようだ。

「ええ？！ 亜夜奈のほうが大人っぽくていいじゃん！ ってか彼氏持ちにいわれてもなー」

「あなたに彼氏できないこと、私は不思議でならないんだけど」

「おてんばお嬢の相手は疲れそうだからじゃね？」

（さすが遅刻仲間。飛鳥のことちゃんと見てるなあ）

「失礼ね！ 私は……」

「おてんばお嬢様、そろそろ始めていいですかね？」

落ち着きのある若々しい声で彼らのクラス、三年五組の担任の先生が背後から注意をした。

そして飛鳥は父親が作ったサンドイッチの遅い朝食を食べながら、先生たちの引率で京都へ無事到着してすぐに重い荷物をホテルに残し、彼女は丁寧に僕を重い大きなカバンから小さなカバンへと付け替えた。身軽になった体で沢山の寺社を見てまわってホテルに戻り、朝騒いでいた二人とともに夕食を食べながら今日の楽しかった出来事を話し合った。飛鳥は今日行ったある神社が気に入った様子で学問の神様が祭つてあることをしきりに強調し、しっかりとお参りしてきたから今度の高校入試はばっちりだと確信を得たような口調で話をしていった。僕が見るに飛鳥の成績はよくもなく悪くもなく、といったところだろうか。そんな話が終わらないまま夕食時間は終わり、飛鳥と亜夜奈は同室なためそのまま部屋に戻りつつずっと夕食の続きの話をして、部屋に入ってから消灯時間ぎりぎりまで盛り上がった。

次の日の朝、僕は六時に起きた。起きたというより起こされたといったほうが正しいだろう。

「おはようあすか。昨日は楽しかったね！今日も一緒に楽しもう！」

元気の良いハリのある声で飛鳥に語りかけられて起こされた。お寝坊さんの彼女が珍しく目覚ましなしで起きたようだ。僕はそうだねと言い返したが彼女には聞こえていないようで、彼女はすぐさま僕に背を向けて支度を始めた。僕はこの元気の良いハリのある声が好きで、これからもずっとこの声を聞いていられると思っていて、それは間違っていた。先程の僕に向けた挨拶が中学時代のハリのある声の最後だった。

六時半、ベッド横にある備え付けのデジタル時計が鳴り出した。と思った瞬間、ドアを強く激しくノックをする音と担任の先生の落

ち着きの無い声がアラームの音を掻き消した。

「世越さん。起きてますか？ 少し話があるのでロビーまで来てください……！」

飛鳥の顔は呼び出されるような悪いことをしたかなあと考えている様子であったが、彼女は早起きをして身支度が済んでおり、騒ぎで起きた亜夜奈が眠そうな声でどーしたのと聞いてきたが、飛鳥はよくわかんないけど行ってくるかと亜夜奈の顔を見ずに言いながらすぐに廊下へ出て先生の後を追った。僕を少し震える右手で握って。

「よく聴いてください」

飛鳥が深く沈みこむソファに座ったとたん先生が話し出した。

「今から先生と一緒に帰ってもらいます」
僕を握る手が強くなった。

「お母さんが倒れたんですか？」

「いえ、お母さんではなくお父さんです」

「え……？」

飛鳥の母親は昔から病弱で、飛鳥を生むときに生死をさまよった体の持ち主であり、倒れて病院へ運ばれることはたまにあった。しかし彼女の父親はとても健康体に見えて、飛鳥の元気の良さは父親譲りであった。

母親の世話や家事は基本父親がしており、飛鳥はそれを手伝っていたりした。その父親が何故……？ 過労によるものなのだろうか？ 僕は一瞬思ったがいつも彼女が良く手伝っているようで過労で倒れることはないだろうと確信していた。

「正しくは、倒れたというより、とてもいいづらいですが……」

「……亡くなられました」

「え……？」

すべての思考が止まった彼女の代わりに僕が聞いた。先生の話によると、今朝母親は目覚ましをかけていないのにふと目が覚め、手元の時計を見ると六時。いつもその時間の父親はすでに色々支度をしたり朝食を作ったりしているはずなのに、何も物音が聞こえない。寝坊するなんて珍しいなと思った母親は起き上がって本が沢山ある父親の部屋に行き、軽くノックをしたが反応が無い。相当熟睡しているのだろうかと思ってドアを開けるとソファで横になっている父親が居た。何かがおかしいと思った母親が近づくとそこにある顔は真つ青。あわてた母親は救急車を呼んだが時すでに遅し。

「今病院で死んだ理由を検査中なので原因は先生にもわかりませんが、とりあえず今から一緒に病院へ行きましょう」

「……？」

何が起きたのか全く理解ができない、いや、理解したくない彼女の体がとても柔らかいソファに深く沈みこむ。

目を閉じる。僕を握った右手を胸の前に持つてくる。左手で僕の頭をゆっくりとなでる。息を深く吸い込む。すべて吐き出す。

先生が飛鳥の部屋から彼女のコートを持ってきて飛鳥の肩にかけた。彼女は目をしっかりと開いて、あのおてんばお嬢の声ではない落ち着きのある大人の女性のような声を出した。

「行きましょう……」

父親は仕事と家事とで忙しくしていて健康診断をまともに受けていなかった。彼の死因は末期がんだった。体が弱い為せわしくなく活動することができない母親の代わりに御通夜とお葬式はほとんどすべて飛鳥がやり、その他の色々な手続きも母親にアドバイスを受けながらすべて飛鳥が片付けた。忙しい一週間を過ごした飛鳥は忌引きの期間が終わり、学校へ行くことになった。決して寝坊することなく、走ることなく、そして色づき終えたもみじが散る様子も見る

ことが無く。

学校へ着いて教室に入ると、一斉にクラスメイト達が飛鳥を見るがそれはいつもの優しい笑顔ではなく、どこかぎこちなくどういう顔をすればいいのかわからないといった表情で飛鳥を見ていた。飛鳥は誰にも目線を合わせることなく自分の席に着いた。

「おはよう飛鳥」

前の席の亜夜奈は普段のやわらかい表情で挨拶をした。飛鳥は落ち着いた声で、エクボがない微笑ほほえみを返した。

「おはようございます」

亜夜奈は少し驚いたようだがあえて何も言わずに前を向いた。チャイムが鳴り、先生が入ってきて出席をとる。教室は何処か暗い雰囲気気が漂っていたがそれを爆発させるかのように勢い良くスライド式のドアをバーンと開けて教室中に音を響かせ、一人の男が駆け込んできた。

「はろー！ えっぶりわん！」

「左山雪博くん、遅刻」

「せんせー！ 今チャイムなったとこじゃないっすか」

「残念ながらチャイムが鳴る前に着席しておかないと遅刻です」

「ちえー」

といいながら彼は明るさを少し取り戻した教室の中を歩き、亜夜奈の斜め右前の席に座ってチラッと飛鳥のほうを見たが飛鳥はこの騒ぎの間ずっとおちついた表情をピクリとも変えなかった。

その次の日からもずっと彼女は落ち着いた表情だった。哀しさも嬉しさもない顔をして、遅刻や寝坊をすることも無くなった。変わったのはそれだけではなく、家の中での様子も変わった。今まで飛鳥は一度も父親の洋書など読もうとすらしなかったのに、一番左側にある本棚の最上段の本から少しずつ、確実に読み進めていった。

街路樹の葉はすべて散り地面と枝に雪が積もる頃、生徒達は高校受験の結果に喜ぶものと妥協したものに分かれ、亜夜奈は元々頭が

よく順調に第一志望の公立高校に受かり満面の笑みをこぼした。飛鳥は秋の成績では考えられないぐらいレベルの高い高校を志望し合格したが、合格発表の日の飛鳥は周りの合格者のような笑顔がなくなり、落ち着きのある顔があった。そして遅刻の常習犯で成績が決しているとは言えない彼が、飛鳥と同じ難関私立高校を受験し、ぎりぎりの点数で受かった。

「よお飛鳥様！ 高校でもよろしく〜」
「……………」

僕は驚いた。彼女は初めて彼を無視した。無言で立ち去る彼女を後ろから追いかけながら彼は必死に叫んだ。

「なんだよ〜。 愛想ねえなあ」

「また一緒のクラスになるかもしれないんだぜ？」

「なあーあす……………」

彼女がこれから通うであろう高校の南門から出てすぐの角を曲がって立ち止まったのと同時に彼は叫ぶのをやめた。代わりに、優しい声で言った。

「……………泣けよ」

すると飛鳥はまぶたに隠していた気持ち、まるで子供のように、今までたまっていた悲しさをすべて流し出した。子供のように……………？ 彼女はまた、中学三年の子供じゃないか！ 子供が、子供らしく振舞った、ただそれだけ。飛鳥はふっと力が抜け、冷たい雪の中に崩れ落ちた。雪博は雪でぬれることなんかためらい無く飛鳥の後ろの地面に座った。そして彼女が冷たい雪に触れないように抱いて引き寄せ足の上に座らせた。

「泣けばいいじゃん」

再び優しい声が聞こえる。飛鳥の泣き声が聞こえる。

「私が触れてる雪だけ、あったかい……………」

僕は朝食と弁当の中身を手際よく作る音で起きると、台所に立つ

ている新しい制服を着た飛鳥の後ろ姿が見えた。朝食を済ませ支度を終えて、行ってくるねと言って母親に微笑みを返してもらった。飛鳥は玄関を出た。外に出ると、暖かい春風と陽気な雪が待っていた。

第一章 暖かい春風と（後書き）

飛鳥の中学時代を描きました。そしてそこから大学に行くまでの間、飛鳥の身に何が起きたのかを次に書きたいと思います。

第二章 視線

飛鳥は線香がほのかに香る墓の前で手を合わせていた。すると遠くのほうからポーッと、何かに見とれているような感じでこちらを向いている少年がいた。彼は親に名前を呼ばれると我に返りそそくさとその場を去っていった。

飛鳥の通う高校では成績優秀者の授業料と入学金の免除というシステムがあり、彼女はそのシステムがあるということでの高校を選んだ。父親が亡くなった後、飛鳥と母親は売れるものはすべて売って古い二階建てのアパートに引越した。母親は外で働くことができないので家で少し内職をし、飛鳥は奨学金をもらいそれで何とか暮らしていた。

飛鳥は雪博のおかげで以前のような元気の良さを取り戻し、父の死を受け入れるようになった。僕は雪博にとっても感謝をしている。僕は彼女の愚痴や弱音を聞くことはできるが、受け取ったものを返す手段が無かった。所詮編みぐるみ、僕の声は彼女に伝わることはないからである。そんな僕の代わりに雪博が飛鳥を支え、励ましてくれたおかげで僕は再びあのハリのある元気の良い声が聞けるようになった。

「飛鳥。で、どーなん？」

「どうって何が？」

「何がって左山くんのことじゃ決まってるやん！」

皆高校を一年間何事も無く過ごし、二年目に入ってしまった頃、去年も飛鳥と一緒にクラスだった歌緒梨が詰め寄った。

彼女は元々京都の生まれのだが、両親の仕事の都合上こちらに移ってきたらしい。ついでに言うと歌緒梨は雪博と同じ野球部のマネージャーである。

「ゆきが……何？」

「はあく。ほんまあんたは鈍いんやから」

（飛鳥、雪博は彼氏かって聞かれてるんだよ）

「鈍いつて……ああ、ゆきとの関係を聞きたいの？」

「そーそー。で、実際どうなん？」

「ゆきは親友だよ！」

「彼氏ちゃうん？」

歌緒梨が凄くがっかりした声を出す。女子高校生は色恋沙汰に首を突っ込むのが好きみたいだな。

「中学からの親友。そういう意味ではゆきのこと好きだよ」

「そういう意味、つてのがなかったらいいんだけどねえ」

「うわっ！ いたん？」

「何だよ歌緒梨。人をお化けみたいに。俺と飛鳥の変な噂流してるのおまえか」

雪博が歌緒梨の背後に立っていた。

「さ……さあ？ なんのことかなあ？」

「おまえ……目が泳いでるぞ」

「ゆき。部活は？」

話をさらりと受け流した飛鳥の言葉で歌緒梨は助かったようだ。歌緒梨ももう少しばれないような素振りをすればいいのに、と僕は思ったが飛鳥が仲良くする人は大抵素直でいいやつばかりなのでそれは無理かと思いなおした。

「今から行く。飛鳥も早く帰れよ」

「うん！ 今日卵の特売日だから早く行かなきゃ！」

「あんた……主婦か」

飛鳥は歌緒梨の言葉を聞き逃したようで、すぐにばいばいと叫んで教室から出て行った。雪博と歌緒梨はまだ話していたようだが、僕は飛鳥のカバンにぶら下がっているの何話しているのか遠くで聞こえなく、その姿も飛鳥が体の向きを変えたのですぐに見えなくなった。雪博の顔……なんだか珍しく真剣だったような気がしたが

……良く見えなかった。

夏。セミが鳴き始めた声でどこと無く趣おもむきが感じられる頃、野球部は熱かった。この高校は全国高等学校野球選手権大会、いわゆる「夏の甲子園」の出場をなんか出たことも無かったのに、今年はいけそうな雰囲気があったからである。雪博は中学でも野球部だったが、なにぶん公立中学校であるためそんなに強くは無かった。しかし彼はもともと身体能力が高かったのと野球に対する熱心な姿勢により急激な伸びをみせ、二年生で唯一レギュラーにいた。この野球部は雪博が居るおかげで今年甲子園に出場できるといつても過言ではなかった。

六月から七月にかけての予選を快勝し、今年も予選を無事通過。その間もずっと雪博は活躍していた。そして本選が行われる一週間前、僕は雪博が飛鳥に隠していた秘密を知った。

次週に雪博が夏の甲子園に出ると聞いた飛鳥は母親の了承を得て雪博の練習風景を見に行くことにした。彼女は練習場に着くや否や驚きの声を上げた。

「すっごーい！」

野球の様子など見たことも無い飛鳥は調整のための紅白戦が行われている練習場のすぐそばまで突っ込んでいった。そして彼を見つめるや否や叫んだ。

「ゆーきー！っ！！」

その声に気づいた彼は思わず飛んできたフライ球を落としかけたが何とか集中力を球に戻しぎりぎりでキャッチした。

「……飛鳥？」

彼も彼女をすぐに見つけた。なぜなら、一人だけ目立っていたから。

「ゆきー！っ！」

再び叫んで大きく手を振る。僕は飛鳥を凄いと思った。先程の発言でこんなに静まり返った練習場で再び同じ言葉を発しはしゃぐ姿は

完全に目立っていた。目立っていたって言うより、浮いてた。うん。周りにいた数名の観客たちがざわざわとし始めて彼女は目立っていることに気づいたが、それでもなお手を振り続けていた。

「左山！」

「あ、はいっ！」

そんな飛鳥がかわいいなあと見とれていた雪博はキャプテンに声をかけられてびくつとした。

「あれ、誰だ？」

「えっと世越飛鳥っていう俺の……」

「俺の親友です」

彼女、といおうと思つてやめたようだ。飛鳥は手を振るのをやめたが笑顔でまだ雪博の方に向いていた。すべての出来事を見ていた野球部の部員たちは、中学時代よりも少し大人の顔をした飛鳥に見とれるものと、雪博をねたむような目で見るものに分かれた。この飛鳥が引き起こした事件、後の彼の運命に大きな影響を与えることになる。

歌緒梨はこの騒動で飛鳥のところに飛んできて、飛鳥の手首をつかんでを引つ張り練習場から少し離れたところにつれてきた。

「あんた何やってんの？」

どこか怒っているような雰囲気話し出した。

「何ってゆきが練習してるところを見にきたら皆応援してたから私も……」

「ええか？ 左山くんはまだ二年なんやで？」

「だから？」

「確かに野球は上手いけど、いわば左山くんは他の三年を蹴落としてレギュラーになってるんやで？ よろしくないと思ってる三年もいるのわかる？」

「なんにも無けりゃいいけど。もうファンみたいな行為しーひん方がいいと思うで」

飛鳥の返答を待たずして言うことをすべて言い切った歌緒梨はすぐ

にその場を去っていった。

練習が終わって帰ろうとする雪博に飛鳥は近寄っていった。その手には僕が握られていた。

「お疲れ様！ 雪博！」

飛鳥が雪博の顔のまん前に僕を持って行き、人形劇の人形のようにせりふをつけて動かした。

「ありがとう。 えっと……こいつの名前って何なの？」

「あすか」

「ほお。 一緒の名前なんだ。 ありがとう、あすかさま！」

「どういたしまして！」

少しおどけた声で話す飛鳥を優しい目で見ながら微笑ほほえんだ。

「飛鳥。 こいつ触っていい？」

「いいよ」

僕は飛鳥から雪博に渡され彼に見つめられた。

「あれ？ 飛鳥！ こんな時間に学校いるの珍しいね！」

遠くのほうから飛鳥のクラスメイトの集団 といっても5人ほどのグループだが

のうちの一人が飛鳥に声をかけた。

「行ってきていいよ。 俺はここで飛鳥様のお帰りを待ってるから」

「」

「もう！ いい加減やめてよ！」

と笑い、

「ゴメンね！ すぐ戻ってくるから！」

といって飛鳥はグループのいる方向へ走っていった。 途端とたん、雪博は僕に語りかけてきた。

「なあ……あすか。 俺、やべーんだ」

（どうした？）

「足が……ぶっ壊れそうだ。 体が練習についていけないみたい

だ……」

「何してんの？ 左山くん」

「何も。飛鳥を待ってるだけ」

無意識に彼は僕を隠した。

「飛鳥は？」

「あつちで話してる」

「ちょうどいいな。なあ、足大丈夫なん？ 今日ちょっと引きずってへんかった？」

「だんだんきつくなってきたかもだな……」

「まだ二年なんやしレギュラーからおりたほうがいいんちゃう？ 言いづらいたらうちが監督にいつとこか？」

「だめだ。飛鳥に心配かけたくない。俺の怪我を知ったら心配するなといったって意味無いぞあいつは」

「親友なんやしちよつとぐらい心配かけさせてもいいん……」

「歌緒梨は飛鳥の父親のことを知らないからそういえるんだ！」

「擦り傷ちよつとしたぐらいでも、そこからばい菌がはいらないようにしてる？ 膿んだりしてないよね？ 深くないよね？ って怖がるんだ」

「でもあんたの足の怪我は別に死ぬようなことにはならへんのやし……」

「そうだったとしても言えない。飛鳥は母親の世話で疲れてるのに俺のことで心配かけたくない」

「それに今年じゃないとダメなんだ」

「なんで？ なんかあるん？」

「飛鳥の父親の三回忌。俺は飛鳥に夢を見せたい。飛鳥の父親に俺が甲子園出る姿見せて安心しなうて言いたい……！」

「でも靱帯が伸びかけてて疲労骨折の前兆が出てるって……。そんな格好つけてどーすんの？」

「たっただいま〜！」

飛鳥が帰ってきたようだ。

「おつかえりい〜。さて帰るか！」

と先程の神妙な声とは全然違う声で雪博は答えた。

甲子園まであと四日、選手たちは休暇を与えられた。ちょうど日曜日だったため雪博は飛鳥を近くのテーマパークに行かないかと誘ってきた。足が痛いはずなのに、何かに気づいているような感じでもついていた。

雪博は飛鳥と一緒に色々歩き回ること自体すら楽しんでいても幸せそうな顔をしていた。お昼時、彼女と彼は公園を模した区画のベンチに座り、彼はフードカートでなんか買ってくるけど何がいい？と飛鳥に聞いてきたが彼女はなかなか決めれず、僕を突き出しこういった。

「あすかと一緒に選んできて！」

ここは……病院？くらくらする頭で僕は目覚めた。僕は何故が大泣きしている飛鳥に握り締められていた。何が起こったのだろうか？

「ねえ、あすか。何が起こったの？ 答えて？」

飛鳥が僕に問う。僕もわからない。気持ち悪く感じる頭をフル回転させて考えてみる。そう僕はテーマパークに居て、飛鳥から雪博に渡されて、その後……あぁうつすらと思い出してきた。

雪博は僕を受け取りその辺を歩き始めた。疲れているのだろうか、それとも足が痛むのか、雪博は少しふらふらと歩いていた。すると突然背後から野球部のレギュラーになれなかった三年数名が声をかけてきて、建物と建物の間で広いところからの死角に雪博を引っ張っていった。そして二年の癖に生意気だとか、かわいい女の子を連れて歩くのが目障りだとか言い、そして僕を奪い雪博をからかい、それでも雪博はじっと怒りをこらえていた。すると僕を持っていた三年がいきなり地面にたたきつけた。と思ったら別の背の高い三年が僕を拾い上げ雪博の手の届かないであろうところまで持ち上げた。

高校生になってまで子供の遊びをやるようなダサイ三年たちだった。雪博は先輩たちがレギュラーになれない理由がわかりましたよ、といって冷静に言った。が、次の瞬間彼は、切れた。ついでに彼の鞆帯も。

彼は僕を奪い返そうと飛び上がったとき、

「バチン！」

と鈍い音をさせた。たたきつけられたダメージで薄くなってゆく意識の中僕が見たのは、彼が僕を奪い取ることに成功してその場に倒れてゆく様。興奮している三年たちは倒れこんだ彼を集団で囲い…。

「きゃあー!!」

という声で僕は意識をkarouうじて取り戻し、見るとそこには驚きと恐怖に満ちた飛鳥の顔があった。

「ゆ……き……」

「……………飛鳥……………?」

「救急車呼ぶから待ってて!!」

「……………飛鳥」

彼は何かを悟ったかのように話し出した。飛鳥は雪博の傍まで来た。

「……………ゴメンな。夢、見させてやれそうに無い」

「……………泣けよ。絶対。また中学みたいな顔すんなよ……………」

「何? 何を言ってるの? 雪博?」

「俺は……………そういう意味ではなく……………好きだよ……………飛鳥様……………」

ここで、僕と彼の意識は消えた。

飛鳥は線香がほのかに香る墓の前で手を合わせていた。墓標には「左山家之墓」と書かれている。

「ゆき……………誰にこんなひどいことされたの?」

犯人は三年だということは闇に消え、甲子園出場を果たした雪博のいない野球部は初戦で敗退した。

目をつぶって涙の細い腺を頬につけながら手を合わせる彼女を、僕はどうかしてあげたいと思ったがどうにもできなかった。僕の代わりにやってくれる雪博も、もう居ない。彼女と一緒に悲しみに浸っていた僕はどこからか視線がこちらに向いているのを感じた。見回してみると一人の少年がいた。何かに見とれている様子で、視線を探るとそれは飛鳥に向けられている。

「ゆづき！」

飛鳥ははっとして顔を上げた。そして見知らぬ女性が叫んだ言葉を聞き間違えたと気づき、ため息をつきながら微笑んで僕にふれた。

「今、ゆきつて言ったのかと思った」

そして飛鳥に見とれていた彼はゆづきという名前らしく先程の名前を呼ばれたことで我に返り、そそくさとその場を去っていった。飛鳥は全く彼に気づかなかった。

第二章 視線（後書き）

前回を書き終えたときはこの章で終わらせるつもりだったんですが長く書きすぎて高校までしかかけませんでした（汗）

おそらく次章で終幕だと思います。気長にお待ちくださいませ。

最終章 願い

僕は飛鳥に、ゆうきっていう少年が飛鳥をみていたよと言ったがいつもどおり飛鳥の耳には僕の声が聞こえていないようだった。

僕は幾度と無く飛鳥に声が届けと願ったが、それが叶うことは今まで一度も無かった。人形やぬいぐるみは長い年月かわいがられると魂が宿るといわれているようだが、僕はそれは間違っていると思う。正しくは、僕みたいに皆魂は元々あって、長い年月を共にすればするほど互いの心が通い合い、こちらの声が届くのだろうと思う。僕と飛鳥は今年で十二年の付き合いになる。僕はほとんどずっと飛鳥から離れていないから大分と長い年月を共にしているからそろそろ心が通ってくれてもいいと思うのだが……。なかなか上手く行かないのが現実であり、その現実を生きるしかない僕たちは互いに一方通行な会話をして一年が過ぎた。

飛鳥が高校三年に上がり、大学入試を目前にした十二月二十五日、クリスマスで僕と飛鳥が出合った日。歌緒梨かおりの提案で僕たちは京都にある歌緒梨の母親の実家にお邪魔しに行った。メインは歌緒梨の家に遊びに行くというより合格祈願をしに行くことだった。その合格祈願をしに行く神社というのはあの、飛鳥が中学で気に入った神社であった。

「ここは学問の神様が祀ってあるんやで」
得意げに入り口にある大きい鳥居の真下で説明をする歌緒梨だったが

「うん。知ってる！ 中学のときの修学旅行で来たよ」
という飛鳥の何気ない発言でがっかりした。

「あ、でもここほんとご利益あるよね！ 今の高校合格できたし！」
「そやる〜！ やし、大学合格祈願もここでしたら合格間違いない

で！」

自分の地元を自慢できると気づいた歌緒梨はすぐに元気を取り戻し、軽やかな足取りで手を洗居に行き、懐かしそうに見渡しながらゆっくりと歩く飛鳥の腕を引つ張りながら本殿へと向かった。

本殿の前の鈴のところにはすでに数名の参拝者が居て、その中には制服を着た子供とその親と思しき人や、三年前の飛鳥のように修学旅行で来ていると思われるグループや、ジョギングもしくはウォーキングだと思われる格好の人などが居た。少し混雑していたので自然と人々は鈴の前に列をつくり自分の番を待っていた。その列に飛鳥と歌緒梨は加わった。

「やっぱこのシーズンは混むなあ」

「そんなに有名なんだ？」

「うちは結構有名やと思ってるけど」

「へえ……」

そんな会話をしながら飛鳥は何か思いふけっている様子だった。

「ゆき……」

ふと小さな声で漏らした言葉を僕は拾った。おそらく彼女は三年前にはそこにいた雪博の姿を思い出しているのだろう。

「あれ？もしかして飛鳥？」

懐かしい声がして飛鳥は少しうつむいていた顔を上げた。声の主は中学でとても仲が良かった亜夜奈あやなであった。

「あ！亜夜奈！」

「やっぱ飛鳥だったんだ！久しぶり〜！あんたまたかわいくなってるね」

「そんなこと無いよ。まだ彼氏も居ないし」

何処か寂しそうな雰囲気のある微笑みを返した。

「へえ。飛鳥ちゃんまだ彼氏いないのかあ」

「はい」

「じゃあ俺亜夜奈から乗り換えよっかな、なんつって」

「ちょ、冗談でもやめてよ！ 飛鳥かわいいからほんと心配になるから！」

「はいはい。ムキになるなって」

「えーっと、すみませーん」

完全に取り残された歌緒梨が話に割って入ってきた。

「ああ、ゴメン歌緒梨。こちらは私の中学の親友の亜夜奈とその彼氏」

「へえ……初めまして、歌緒梨といいます。うちは飛鳥の高校の友達でこの近所の出身です」

「敬語なんて要らないって！ 同い年なんだし。って隆徳たかのりはいつこ上か」

「別に俺に対しても敬語じゃなくてもいいよ。飛鳥ちゃんも」

「いえ、年上の方には敬語を使うようにしていますので」

「あ、うちも年上の人には敬語いらんって言わはっても一応軽く敬語で話すことにしてるんで」

自己紹介が行われた後の軽い会話を聞くと、亜夜奈も彼氏を連れて合格祈願に来たようだ。そして亜夜奈はふと思いついたかのように疑問をこぼした。

「そっぴや雪博って元気にやってる？ あいつも京都に来てるの？」

「えっと……左山くんは……」

「ゆきは死んだよ」

「え？ うそでしょ？」

「ほんと。ねえ、どうして私の大好きな人って居なくなっちゃうのかな」

誰も答えられない質問を、飛鳥は誰に向かってでもなくつぶやいた。

「ばか雪博……っ！ あんた飛鳥を悲しませないって言ったの嘘だったのかっ！」
空に向かつて亜夜奈が叫んだ。彼の悔し涙なのか、京都ではいつもより早い雪が舞い降りてきた。

「でもね、ゆきは私を心配して言葉を残してくれたから今こうやって笑っていられる」

嘘のない無邪気な笑顔を飛鳥は見せた。その笑顔は舞い降りてきた優しい白い世界の中で幻想的な風景を作り出していた。

その日の夜、僕は夢を見た。飛鳥と雪博があのだテーマパークでデートをして二人ともとても楽しそうだった。あの日とは違い何事もなく穏やかに時は過ぎ、日が落ちテーマパークが閉まるぎりぎりまで二人は遊んでいた。飛鳥は雪博に家の前まで送ってもらい、そして雪博が去ろうと背を向けたとき、飛鳥はその背中に向かつて優しい声で想いを伝えた。

「私も、そういう意味でなく好きだったと思う」

「……ありがとう」

「飛鳥様！ 俺にとらわれるなよ。 飛鳥らしく振舞っておかないと叱りにくるからな」

彼は振り返ることなくそう言い、闇に消えていった。

十二月二十六日、歌緒梨の母親の実家にとまった僕らはお礼をいって歌緒梨とともに帰った。僕は、昨日の夢は飛鳥にこうあってほしいと願ったからあんな夢を見たんだなと思考をめぐらせていると、帰りの道中飛鳥が興味深い話をしだした。

「ねえ歌緒梨、昨日サンタクロースからプレゼントもらったよ」

「え？ 何もらったん？」

「私とゆきのデート。 夢で見たんだ」

嬉しそうに話す。聞くと僕とまったく同じ夢を見たようである。これはもしか心が通い始めた兆候なのだろうか？ そうだとしたら今、僕の声が飛鳥に届くかもしれない……！

（飛鳥！ 僕の声聞こえる？）
しかし彼女は少しも僕のほうを見なかった。

桜の花びらが舞う道を飛鳥と歌緒梨とそして亜夜奈と共に歩いていた。彼女ら三人は同じ大学を受けて、あの神社のご利益があったのだろう、皆合格をして三人で入学を果たした。入学式、彼女らは新品のスーツを着て少し緊張気味にパイプ椅子に座って学長のどうでもいい挨拶を流し聞いていた。特に飛鳥は緊張しているのだろう、学長の話を聞く余裕がなくあたりをきよるきよるしていた。すると何かを見つけたのかいきなり前のめりになった。

「ゆ……っ！」
何かを言いかけたが、今は入学式の真っ最中であることにぎりぎり気づき言葉をのみこんだ。

教室に移動し、一通りの説明が終わり解散してもよいという先生の合図で皆緊張が解けたのか、一度に話し出して教室がざわついた。そんなざわついた教室で亜夜奈と歌緒梨は飛鳥の様子が少し変であると気づきずっときよるきよるしている飛鳥に近づいてきた。

「どうしたん？」

「あ……えっと……なんでもない」

「ほんとに？ 具合悪いなら送っていいこうか？」

「いいよ。大丈夫だから。それじゃね！」

飛鳥は一人急いで家に帰り、母親に適当なただいまを届けた後すぐさま部屋に閉じこもった。

（どうした？ 飛鳥？）

「あすか……私ゆきにそっくりな人を見ちゃった」

（ああ、なるほど。 だからあんなに動揺してたのか）

「……！」

飛鳥が驚いた表情をした。

「あすか、今しゃべらなかつた？」

（僕の声が聞こえるのか?!）

「……気のせいか。疲れてるから聞こえた気がしたのかな」

僕はがっかりしなかつた。一瞬でも伝えることができたから。

飛鳥は引越すときに父親の本はすべて持ってきたようで、山積みになってる本をあるときから少しずつ着実に読み進めていた。そして僕と彼女の会話はあれつきりないまま桜は散り、蝉がなき、もみじが色づき散り、冷たい風が吹き始めた。

十二月九日、飛鳥は知らない僕の十四回目の誕生日、彼女は父親の持っていた本すべてを読み終えた。飛鳥が読んでいた本は、僕は読めないの何を読んでいたのかわからないがすべて洋書であることはわかっていた。そして飛鳥はその洋書をもっとたくさん読みたいと思いつたのか、授業終わりに大学内にある図書館へ行った。

洋書がある本棚は四階建ての図書館の最上階にあり、入り口付近はドアの開閉が気になって集中できないということで奥のほうの席の個別ブースに座って導入部分をすこし読んで選んでいた。すると、男の子が飛鳥の後ろの個別ブースに座るや否や何かごそごそと音をさせ、そしてすぐにすーすーという気持ちのよさそうな寝息をたてた。飛鳥はその寝息が気になったのか、はたまた好奇心旺盛な性格で覗いてみたかったのか、席を立ち、彼の背後に立って窓の方に向いている顔を覗き込んだ。と思つたらいきなり驚いた表情で後ろにのけぞり一歩下がった。そして彼女は彼に微笑んだ。

その次の日、飛鳥は亜夜奈と歌緒梨に昨日のことと入学式で見たものを話した。

「あのね、昨日図書館の四階の隅っこで寝てる人が居ただけど！」

「あー居るなあ。あの人いつつもある時間あそこで寝てるで」

「有名だよな」

「そうだったんだ！ それでね、その人入学式でもみたんだけどさ、すっっごいゆきに似てるの！」

「そうなんやあ。いつも窓側に顔向けてるから顔見たことないわ」
「だから入学式の時変だったんだね」

それから飛鳥はほぼ毎日のように図書館の四階へ向かうようになった。彼が来るであろう個別ブースが見えるぎりぎりの遠さの席から彼が来るまでそわそわしながら待つ。そして彼が来たら眠りに入るまでの間ずっと瞬きをせずに見つめ、眠ったとわかると満足するのか家へ帰る。そんなことを続け、亜夜奈と歌緒梨に「そんなに好きなら告白すれば？ 告白しないまでも会話ぐらいすれば？」などと提案されるが、飛鳥は「また大好きな人を失うのが怖いからこのままでいいの」の一点張りだった。僕は飛鳥には幸せになってほしいから僕も必死で彼に話しかけてみたらと言ってみるが、やはり声は届いていない様子だった。

そんなことをずっと続けて、再び桜の花が咲いて散り、蝉が鳴き、もみじが色づき散り、冷たい風が吹き始めて、僕の十五回目の誕生日を迎えた。亜夜奈と歌緒梨は飛鳥に彼への接近を進めるのを諦めた様子だった。けども僕は、たった一人でも訴え続けた。飛鳥の幸せを願って。

飛鳥は大人の女性の雰囲気を身に付け、中学の頃よりもさらに美人になっていた。そんな彼女は何度か告白をされたようだが、すべて断り続けた。「私には好きな人が居ますから」と。

飛鳥は今日もいつもの席で遠巻きに彼が来るであろう席を見つめていた。そして彼はいつもどおりの時間にいつもどおりの仕草で座り眠り始めた。そのとき何故か僕は急に猛烈な眠気に襲われた。隣を見ると飛鳥も同じようだ。母親の看病疲れなのか、こくりこくり

と今にも寝てしまいそう。僕は思い出した。一昨年十二月二十五日の夜を。

(雪博！ おまえも飛鳥の幸せそうな顔を見たいだろう？)

(今ここで、飛鳥に夢を見せてやってくれ……)

(サンタクロース……ほんとに居るなら僕に少し早いプレゼントを…… 15回目の誕生日なんだ……！)

(飛鳥……僕と同じ夢を見てくれ……飛鳥……彼の名前はゆうきっていうんだ。彼も飛鳥のことを気にしているはずだ……きつと上手くいく……)

薄れ行く意識の最後、窓の外にいつもより早い雪が降っているのが見えた。

最終章 願い（後書き）

とところどころ無理やり合わせたような感じがあるかもしれませんが…
…。ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4496d/>

いつもの図書館～あすか～

2010年10月28日08時10分発行